

◆関東羈旅 (カントウキリヨ) No.40  
陶板の道(栃木県益子町)

真岡鐵道

暦の上では秋なのに、まるで真夏日が居座っているような休日、陶器の町「益子」を訪ねました。JR「休日おでかけパス」を使って水戸線「下館駅」まで向かいました。下館駅で「真岡鐵道」に乗換え「益子駅」に向かいます。真岡鐵道は蒸気機関車も健在です。

今日は「時刻表の日」。さぞ鐵道ファンが集まっているかと思いきや人はまばらで、発車時刻を待つSLの汽笛が響き渡ると何とも言えない気持ちになりました。この情景を焼き付けたい一心で、蒸気たなびかせる勇姿に見入ったりカメラにおさめたりしました。

焼物、陶芸にチャレンジしたことはないのですが、見るのは好きで、骨董市やアンティーク店を歩くことは多く、横浜のワールドポーターにある「舶来館」や赤レンガ倉庫などをよく覗いています。ただ、知識はありませんので、勉強も兼ねて益子を散策することにしました。益子駅に着くと駅前には人が入れるくらい大きな益子焼の壺が飾られていました。

川柳・益子にて

- ・陶板の 道に描きたる 緑かな
- ・機関車の 汽笛が響く しずけさや
- ・焼物の 香り漂う 益子駅

益子焼と濱田庄司

益子駅から徒歩で15分くらい、陶板の道を上りきったところに「陶芸メッセ・益子と益子陶芸美術館」があり、入館料を支払い、伝統ある益子焼を見学することができました。

益子焼は江戸時代末期、笠間で修行した大塚啓三郎が窯を築いたことに始まると言われていています。優れた陶土を産出し、大消費地東京に近いことから、鉢、水瓶、土瓶などの日用道具の産地として発展しました。1924(大正13)年、濱田庄司がこの地に移住し「用の美」として民芸運動を進めるかたわら、地元の陶工たちに大きな影響を与え、益子焼は「民芸品」としての側面を持つようになりました。若手からベテランまで窯を構える陶芸家は多く、その作風は多種多様です。敷地には、移築された「旧濱田庄司邸」があり、濱田庄司が愛用した登り窯なども復元されていました。

- ・ブナの葉が 芝生に散らす 秋の色
- ・豪快な 濱田庄司の くすり掛け
- ・用の美と 洋の美に酔う 美術館
- ・こねた土に いのち吹き込む 登り窯

美術館の売店で、濱田庄司執筆の「無盡(尽)蔵」という本を購入し、散策しながら帰路につきました。途中、すれ違う学生たちが「こんにちは」とあいさつをしてくれたので、戸惑いながら挨拶を返しました。見知らぬ観光客にも挨拶をする純真な姿勢に、忘れかけていた大事なことを教

えてもらったような気がしました。

益子焼の歴史は江戸時代末期に始まり、大正末期に濱田庄司が定住し、1979(昭和54)年に国の伝統工芸に指定されています。

街を散策するだけでも、現代風マグカップやティーカップが並び、益子焼の歴史を若手の作家たちが受け継いでいることがわかります。「今度は春と秋の年2回開催されるという益子大陶器市にも来てみたいな」と思いながら、益子の散策に満足し帰路につきました。

- ・ 不可解な 乙女心に うわの空
- ・ 今風に アレンジされた 益子焼
- ・ カップルで 品定めする ティーカップ

「海員だより」